

教育長だより

No. 5

(改訂版)

2022年4月20日

家庭訪問 どうしますか？

～ 子どもをまるごと捉えるために ～

小中学校ではもうじき家庭訪問が始まります。中にはコロナ禍に合わせて「個別懇談会」の学校もあるようですが。まあ今年もそういう判断をされる学校があっても仕方がないと思います。でも、そんなところでもできれば別の時期に実施してほしいですね。それは、家庭訪問が子どもをまるごと捉える一つのいい機会になるからです。

ほとんどの子どもたちは毎日登校してきます。同じような荷物を持って。ましてや中学校は制服ですから、服装まで一緒です。でも、それぞれの家庭状況はさまざまです。中には「重い生活」を背負って来る子もいます。また、今の日本では貧困や虐待などは「見ようとしなければ、見えない」状況です。「踏み込んでいかないと見えない子どもたちの生活」があります。そんな生活の一コマでも見ることができたら、家庭訪問に行く価値があります。私たちの先輩は、そんなところを見つめるために家庭訪問を繰り返されていました。かつては『靴べらしの同和教育』とも言われていました。表向きは同じように見える子どもたちですが、重い生活をかかえざるを得ない子が何人かいます。そこが担任の先生に見えたとき、「ああ、この子は学校に来てくれるだけでもがんばってるんやなあ。」と、いとおしくなります。そんな子を学級の真ん中に据えて仲間づくりをしていました。この姿勢は今も変わりません。人権教育の原点だと思います。

私が野洲小の校長のとき、家庭訪問から帰ってきた先生が職員室でこんなことを報告してくれました。子どもの家に行って初めてわかったことがあったからです。紹介します。

A 先生「校長先生、ちょっと聞いてくださいよ。うちのクラスの〇〇さんそこへさっき行ってきたんですけど、はじめ、びっくりしました。通された部屋に洗濯物が山のようにあったんです。お母さんはちょうど仕事から戻られたばかりで、恐縮してはりましたけど・・・子どもたちがみんな学校に上がったんで、3人の子育てのためにお母さんはたいがい遅くまで仕事されてるそうです。その洗濯物を取り入れるのが一番下の〇〇〇ちゃんの日課だとわかりました。うちのクラスの子です。私、今日（家に）行って、〇〇〇ちゃんのがんばりが見えてホントによかったです。お母さんとそんな話もできました。子どもたちにそれぞれ家事を分担させてはって、えらいお母さんですね。」

話を元に戻します。今の先生にとっては、一般的には「家庭訪問で、保護者さんと何を話そうか？」と考えておられるのではないのでしょうか。でも、たかが10分や15分では、突っ込んで話すことは難しいと思います。また、「親の願い」などを聞くことも同様に時間切れになりそうです。どうしましょう？ 少しでも「実のある」家庭訪問にするには？ ヒントは「ケース会議」です。校園では、課題の重い子をめぐって関係者が論議する「ケース検討会議」が時々行われます。そのときに使う『ベースシート』（一人の子を「まるごと」見ていくための資料）があります。家庭訪問では、ベースシートに書けるような中身（家庭環境や生育歴、親の願いなど）を少しでも話しましょう。でも、いきなりは難しいですね。信頼関係がないと。そこで、まずは仕事について聞いたらどうですか？ 「なんで仕事やねん。」という人もいると思いますので、以下に書きます。

私はもと中学の教師ですので、中学校の例を紹介します。喫煙（数人がタバコを吸うという問題行

動)がわかったら、学校ではすぐに本人たちを指導します。その後、保護者さんに学校に来てもらいます。このとき、何をにおいても来てくださったら問題はありますが、わが子の生指で学校に行くのは、保護者にとっても「気が重いこと」です。「ちょっと仕事が・・・」という理由にもなりかねません。ですから、日ごろ親御さんが何時までどこでどんな仕事をされているのかぐらいは、知っておく必要があります。

さらに、それ以上に人権・同和教育の観点から言うと、「親を人生の先輩として見ること」の大切さです。日常的に「子どもに一番近い大人は親」です。いろんな失敗や成功体験をしている親御さんは、子どもの「生きかた」の一番の鏡(モデル)となります。つまり、「親の生きざま」は、子どもの生き方の一番の教科書と言えます。(4年生の『2分の1成人式』では、そこに着目してほしいです。)中学校のキャリア教育では、単なる仕事でなく親に焦点を当てます。「親がどんな思いで働き(あるいは働けなくなったか)、子どもにどんな願いを持っているのか。」これを学びます。どの親御さんもわが子にさまざまな「思い」を持っておられます。こうして、「親の思い(願い)」が見えた子は、たとえ「荒れ」たとしてもいずれ立ち直ります。(思春期ですから、ちょっとぐらい、あるいは「相当に」ゆれますが、・・・)「たかが仕事、されど仕事」です。もちろん、親御さんの仕事を聞いて「そうですか。」で終わってはいけません。もう一步の「踏み込み」が必要です。自分なりに考えて「でしたら、〇〇なんかもされるんですか? 大変でしょうね。」などと返します。そうすると、そんな**会話の中に、きっと親御さんの願いや苦勞、喜びなどが出てきます。これが家庭訪問の大きな収穫=「宝もの」**です。子どもと話すときの大きな力(「先生とあんたの親とはつながってるねで。」「あんたの家のこと、先生は知ってるで。」ということもできます。)になります。これは『ベースシート』に書く重要なカギ(子どもをまるごと見る材料)となります。私は先輩から「子どもを口で泣かしたら、一人前の教師や。」って教わりました。「口で泣かす」とは、先生の話で子どもが泣くということです。その子の「琴線にふれる」とも言います。子どもが心に引っかかっていることを先生が射止めたとき、子どもは「先生に自分のしんどさをわかってもらえた!」と、それこそスーッと涙を流します。そんな体験、子どもと心で繋がった体験を一度でもすると、教師という仕事はやめられません。それこそ『教師冥利』に尽きるのです。(これについては、また機会を改めて。)

今回、残念ながら「懇談会」に切り替えられた学校は、夏休みなどの機会に家庭訪問を実施されることをお勧めします。そちらの方が時間を気にせずに親御さんとお話しできると思います。また、家庭訪問は「子どものために」という意味はもちろんですが、「先生自身の成長のために」という意味もあります。様々な親の「願い」や「生きざま」に触れることができるからです。

そして、もう一つあります。それは「学校は先生の土俵」、「家庭は保護者の土俵」ということです。土俵とは、今でいえば「ホームグラウンド」、サッカーでは「ホーム」と「アウェイ」でしょうか。学校は先生方が考えられている以上に保護者の緊張が違うんですよ。お知りおき願えたらと思います。ただ、働き方改革と混同しないでください。何でもこれを出して、学校の取組みを次々とやめていく人がいますから。ほとんどの方はご承知だと思いますが、**働き方改革の中心は、「先生が子どもとしっかりと向き合うために行うもの」**です。子どもをまるごと捉える家庭訪問はその根幹の一つですから。

それから、『人は見た目が9割』という言葉もあるように、家庭訪問では、**先生自身の身だしなみにはくれぐれもご注意ください**。第一印象がプラスかマイナスか、問題が起きたときに有利です。

また、「**特に課題の重い子へは、できるだけ早めに行く。**」これが鉄則です。特に中学校の先生は生指がらみでご存じですよ。プラスの出会いの大切さを。学力や行動面に重い課題を持つ子(2年生以上)は、定例の訪問時期を待たずに、一日でも早く行くことをお勧めします。保護者も少しでも早く新しい先生と一緒に何とかしたいと考えておられます。クラスに何人もいるわけではありませんから。

「いい出会い」は親御さんとの信頼関係づくりにもなります。(もちろん、定例の訪問はパスできます。)